

生涯教育研修活動報告書

生理検査研究班

- 1 実施日時：2022年11月19日 14時00分～16時40分
- 2 会場：鴻巣市市民活動センター 会議室 A・B 教科・点数：専門－20点
- 3 主題：症例・臨床から見る血液ガス・呼吸機能
- 4 講師：講演1：どう考える血液ガス
講師：家城 正和
(地方独立行政法人埼玉県立病院機構 埼玉県立がんセンター)
講演2：臨床から見た呼吸機能検査の見え方(使われ方)
～検査結果の妥当性の判断を含めて～
講師：加藤 政利(日本医科大学多摩永山病院)
- 5 協賛：チェスト株式会社
- 6 参加人数：会員 18名 賛助会員 3名 非会員 0名
- 7 出席した研究班班員：南雲涼太 横尾愛 工藤淳子 小宮山英幸 家城正和

8 研修内容の概要・感想など

症例・臨床から見る血液ガス・呼吸機能をテーマに現地開催で研修会を行った。

前半は血液ガス読解のための基礎知識を家城氏が講演した。呼吸の役割は代謝により産生される大部分の酸を二酸化炭素として体外に排出し、消費した酸素を補うとの話から講演が始まった。血液ガス分析結果で把握するのは、肺胞換気と酸塩基平衡、ガス交換能であり、これらの機能を把握するうえで重要になるのが pH と PaCO₂、HCO₃⁻、PaO₂、A-aDO₂、SaO₂である。各項目についての解説と読解手順の説明があった後、症例を各自で読解する時間が20分設けられた。症例は3症例で、COPDにおける酸塩基平衡障害と2例の混合性酸塩基平衡障害が用意された。呼吸性アシドーシスと代謝性アシドーシスに別の酸塩基平衡障害が合併した混合性酸塩基平衡障害を経験したことで読解への基礎知識が身についたと思われる。

後半の講演に先立ち最新の精度管理プログラムの紹介とVC、FVCの実演が行われた。

後半は、臨床から見た呼吸機能検査の見え方・使われ方を検査結果の妥当性の判断を含めて加藤氏が講演した。呼吸機能検査の重要性と新しいガイドラインについて従来のガイドラ

インからの変更点が説明された。ガイドラインは2004年に日本呼吸器学会から発刊されていたが、2021年に改訂された。主な改訂内容として、外挿気量が「0.10LあるいはFVCの5%のいずれか大きい値より少ない」となったこと、呼気プラトーの指標として「呼気量の変化が最低1秒以上0.025L未満」となったとの説明があった。また、吸気量の確認としてFIVC（努力吸気肺活量）が掲載されている点も紹介された。

呼吸機能検査は被検者の努力に大きく依存する検査であるため、吸気や呼気のタイミングを検査技師がリードしていくこと、検査を円滑に進めるうえで患者さんの名前を入れながら会話をすることがリードの上では効果的であるとのことであった。

今回、血液ガスの読解手順と呼吸機能検査の着眼点、ポイントが学べたことで呼吸生理への理解が一段と深まったものと推測される。

提出日：2022年12月15日

文責：家城正和